

英文ジャーナルの評価、研究評価、インパクト評価をめぐって

岡田雅浩

●英文ジャーナルの評価

英語の学術文献データベースといえば、なんといってもWeb of Science（以下WoS）とScopusだろう。筆者はアジア経済研究所がWileyから発行する英文雑誌（*The Developing Economies*）の編集に長く携わってきたため、WoSにもとづいて作成されるJCR（Journal Citation Reports）に掲載される雑誌ランキングやインパクトファクター（以下IF）の数字は、気にしたくはないのだが、無視できない指標であった。世界では、JCRにランキングされているだけで質の高い雑誌であると評価されるのだ、と先輩から聞かされ、以前はそういうものだとして安んじていた。しかし、近年はランキングに収録される雑誌の数が大幅に増え、またIFを知る人が増えたせいもあり、もはや「ランキングされている雑誌」ということの神通力は消え失せてしまったと思う。

ジャーナル論文を主な研究業績とする分野（社会科学であれば経済学や心理学）であれば、自分の論文をIFの高い有名な英文ジャーナルに掲載したいと誰しもが思うだろう。分野によって異なるが、自然科学（特にサイエンス）は基本的に引用文化（研究成果を論文で発表し、自身の論文のなかで他の関連論文を参照する）が発展しており、一般論として、IFのような定量的な指標が研究成果評価の参考指標として利用されることには違和感がないようだ。しかし、人文・社会科学ではそれほど引用文化が進んでいないことやIFの数値が低いこともあり、ピアレビュー（同じ分野の研究者による査読）が重視されているといわれる。

ここで注意が必要なのは、IFは雑誌の評価であって、個々の掲載論文の評価とは異なる点である。また、学問分野で数値が大きく違うので分野をまたいだ比較はできないことにも注意が必要だ（たとえば、生命科学と経済学では数値の桁が違う）。また、引用が多い

からといって必ずしも質が高い論文といえるわけでもないらしい。たとえば、引用が多いといっても、批判的に引用されている場合、必ずしもその論文の質が高いかどうかは分からない。過去にイギリスで実施された研究評価のデータを使ったIF等の定量指標とピアレビューの結果の相関を分析した研究も多数あり（参考文献①、p.155）、分野によって論文の質と引用数の相関がかなり違うこと、若手研究者・女性研究者・学際的研究分野では引用が低くなる傾向があること等が指摘されている。雑誌編集者からすると確かにIFは無視できない定量指標であるが、研究者や評価者はあくまでも参考資料として定量指標をみるべきであろう。

IFを含むこれまでの定量的な指標が誤解されて一人歩きしてしまうということもあり、ビブリオメトリクスを補完するものとして、最近では多様なオルトメトリクスとよばれる指標も考案されてきている。参考までに、どういったメトリクスがあるかを表1に示す（詳しくは、参考文献②参照）。こういった指標もはっきりと数字で示されるため、確かに便利な参考指標になるだろう。ただ、どれをとっても研究の質の代理変数になるような指標ではない、というのがコンセンサスのようだ。定量指標をメトリクスと表現するとそれっぽく高尚な響きがあるので、より中立的なニュアンスのインディケーターという用語を使うべきだともいわれている。

●研究組織としての評価

欧米やオセアニアでは大学等の高等教育機関の研究成果を評価する試みが以前から実施されている。イギリス、スカンジナビア諸国、オランダ、ベルギーはピアレビューによって評価が実施されてきた。オーストラリアやイタリアでは、研究資金の配分には直接リンクしていないものの、研究成果の評価は自然科学では

メトリクスのみ、それ以外の分野ではピアレビューで評価されてきた。

イギリスでは、30年前から継続して実施されており、この分野のパイオニアである。2014年に年間約3000億円の研究資金を提供する資金配分会議（funding councils）によって実施された研究評価（REF2014）の報告書によると、イギリスではピアレビューが主な評価基準であり、多大な労力、時間、コスト（推定コストは2.5億ポンド）をかけて実施しているという（参考文献③）。今回の評価では、これまでのピアレビュー

表1 メトリクスいろいろ

ビブリオメトリクス		オルトメトリクス	
論文単位		論文単位	
Citation Count		Usage Metrics	
雑誌単位		(clicks, views, downloads, sales)	
Impact Factor		Capture Metrics	
Immediacy Index		(bookmarks, forks, favorites,	
Cited Half-Life		saves/readers)	
Eigenfactor		Mention	
Article Influence Score		(blog posts, comments, reviews)	
SCImago Journal Ranking		Social Media Metrics	
Source Normalized Impact		(likes, shares and tweets)	
per Paper (SNIP)		Scores and Rankings	
H5-Index, H5-Median		(altmetric score, altmetrics	
		percentiles)	
筆者単位		筆者単位	
h-Index		Impactstory Profiles	
I10-Index		PlumX Sunbursts	
		ResearchGate RG Scores	
機関単位		機関単位	
Essential Science Indicators		PlumX Group Metrics	
Rankings (ESI)		Altmetric for Institutions	
SCImago Institutions Rankings		Snowball Metrics	
(SIR)			

(出所) 参考文献②を利用して筆者作成。

表2 Research Councils UKによる分類

アカデミック・インパクト
世界的規模の学術進歩
革新的な手法、設備、技法、技術、学際的アプローチ
学術分野の健全性に対する貢献
知識経済の促進
高度に熟練した研究者の訓練
指導と学習の改善
経済的・社会的インパクト
健康と生活満足の改善
富の創造、経済的繁栄、再生
官民第3セクターの研究能力、知識、スキルの高度化
組織の文化と慣行の変化
公共サービスやビジネスを含む組織の有効性と持続性の促進
R&D投資の誘致
社会福祉、社会的一体性、国の安全保障の改善
商業化と開拓
教養や生活の質の向上
環境に関する持続可能性、保護、インパクト
エビデンスに基づいた政策立案と公共政策に影響を与える研究と
それに関係する社会の問題への一般大衆の関与の増加

(出所) 参考文献①、p.104。

(今回の評価ウェイトは65%)や研究環境（戦略、資源、インフラ、具体的には博士号の授与数や研究収入、今回の評価ウェイト15%）に加え、はじめての試みとして、研究がもたらしたインパクトの提示（評価ウェイト20%）が求められた。

ここでいうインパクトの定義が関心をひく。このREF2014でいうインパクトとは、研究成果がアカデミックな領域以外の経済、社会、文化、公共政策・サービス、健康、環境、生活の質などにもたらした効果をさす（参考文献①）。年間4500億円の研究資金を配分するイギリス研究会議（Research Councils UK：RCUK）はインパクトを表2のように表現している。報告書によると、インパクト評価は評価する側からもされる側からも概ね好評であり、今後もこの評価項目は続くようだ（ウェイトが25%になるともいわれている）。

日本でも国立大学法人評価が実施されているが、研究評価には功罪の両面があろう。巷間を賑わす世界大学ランキングも完璧な指標ではない。大学ランキング、評価、メトリクス等の抱える問題に関心のある方には、参考文献④の一読をお勧めする。

(おかだ まさひろ／アジア経済研究所 研究支援部)

《参考文献》

- ① Wilsdon, James et al., *The Metric Tide: Report of the Independent Review of the Role of Metrics in Research Assessment and Management*, 2015. DOI: 10.13140/RG.2.1.4929.1363
- ② Roemer, Robin Chin and Rachel Borhardt, *Meaningful Metrics: A 21st Century Librarian's Guide to Bibliometrics, Altmetrics, and Research Impact*, Chicago: Association of College and Research Libraries, 2015.
- ③ "Building on Success and Learning from Experience: An Independent Review of the Research Excellence Framework," 2016. www.gov.uk/beis
- ④ 石川真由美編『世界大学ランキングと知の序列化——大学評価と国際競争を問う——』京都大学学術出版会、2016年。